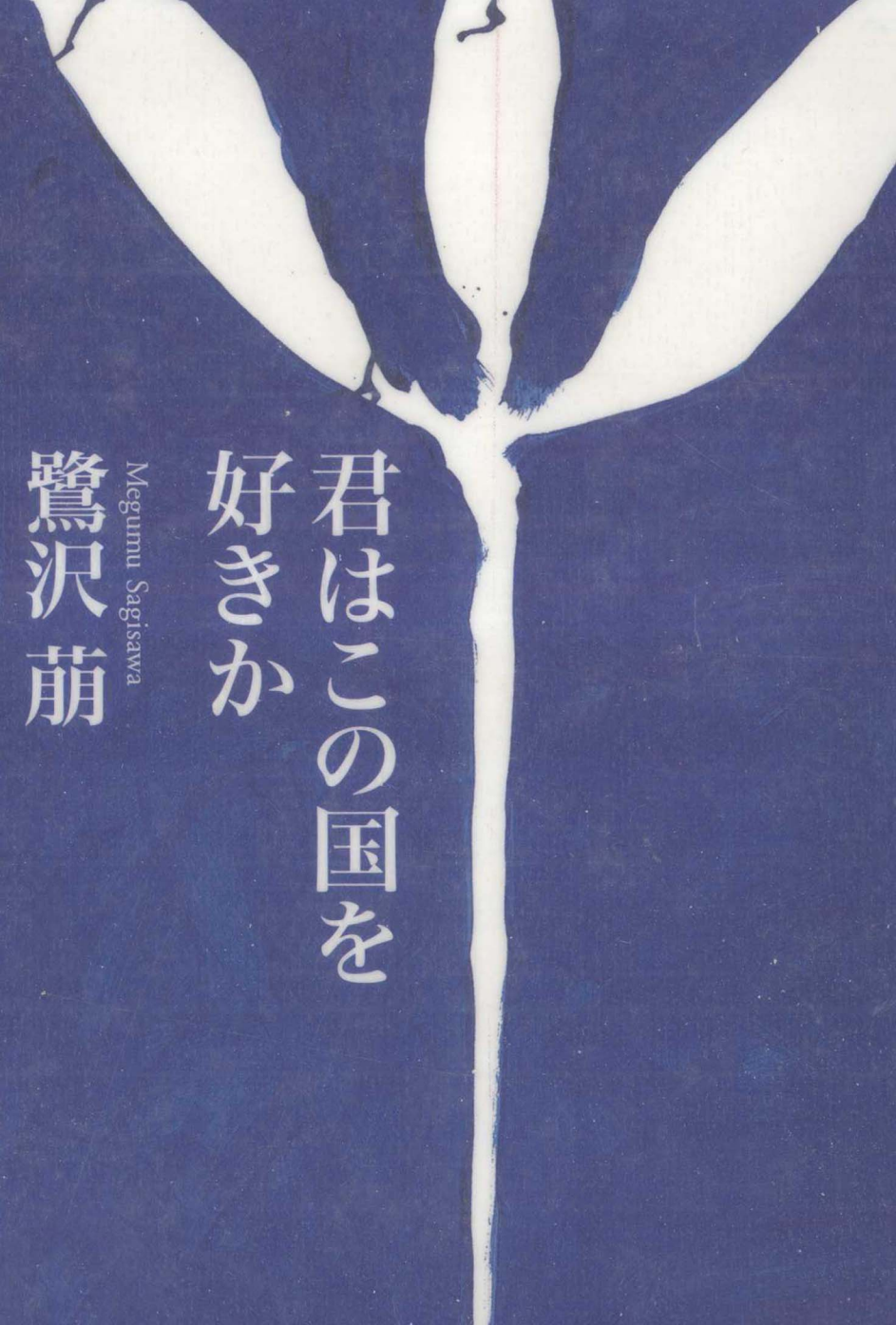




君はこの国を
好きか

Megumu Sagisawa

鷺沢萌

江苏工业学院图书馆
藏书章

君はこの国を
好きか

鷺沢萌
Megumu Sagisawa

ISBN4-10-378003-7 C0093

© Megumu Sagisawa 1997, Printed in Japan

君^{きみ}はこの国^{くに}を好き^すか
発行——一九九七年七月三〇日

著者——鷺沢^{さぎさわ} 萌^も

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話——編集部(〇三)三二六六―五四二
——読者係(〇三)三二六六―五一二

振替——〇〇一四〇―五一八〇八

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

目次

ほんとうの夏 5

君はこの国を好きか 103

あとがき 234

装画 黒田アキ
装幀 新潮社装幀室

君はこの国を好きか

ほんとうの夏

「あーもーやー」

低い声でそう言いながら、俊之はまたベッドの上に俯せに倒れこんだ。「あーもーやー」というのは、どうしようもなく落ちこんだりおよそやる気というものが身体中から失せてしまったりしたときの、俊之の口癖である。本人は「ああ、もうイヤ」という意味で言っているのだが、他人が聞くとまるで抑揚のない、腑抜けた暗号のように聞こえる。

鼻先にあるベッドカバーは、ちよつとカビ臭い埃の匂いがする。そういえばここしばらく部屋の掃除をしていない。

黙っていれば母がまた勝手に入ってきて、この部屋の掃除をするだろう。俊之は自分がいないときに誰かに部屋に入られるのを嫌い、散らかし放題にしていたはずの部屋が帰ってきたらきれいに片付けられていた、などということがあるとムツとしてしまう。

「入らないでって言ってるじゃないよ」

「だって汚くって見てらんなかったんだもん」

「するときや自分でするよ、掃除くらい」

「そう思ってたらずくしなさいよ。それにあんたあんな埃だらけの部屋にいたらノド悪くするわよ」

そのあとで必ずといつていいほど母とそんなやりとりを繰り返している。実際、部屋の出入りに関する母と俊之との攻防は、俊之が中学生くらいのところから続いていた。ときどき自分でも「バカバカしいったらありゃしない」とは思う。

——掃除でもするか……。

水を吸った海綿みたいに重たく感じられる自分の身体を、俊之は無理矢理ベッドから引つpegした。しかし身を起こした瞬間にあのことが思い出されて、俊之は再びベッドに倒れこみ呟く。

「あーもーやー」

さっきから同じことを何回繰り返しているだろう。

俊之は小さなころから、怒りや悲しみをそのまま表に発散させることができない性質である。そうする前になんとなく疲れてしまって、いつも結局は腑抜けた声を出しながらゴロゴロして、激しい感情が自分から去ってゆくのを待つ。

「ホントにもーやー」

力ない声でもう一度呟くと、俊之は目をつぶった。

追突事故を起こしてしまったのは一昨日のことである。しかも隣りに芳佳よしあを乗せていた。

三限が試験なの、と芳佳は言った。しかも語学、まだ覚えてない構文が二十もあるのよねえ、と。

この、少し鼻にかかったような声で語尾を伸ばすのは、芳佳が俊之に頼みごとをしたいという合図である。俊之の大学はすでに夏休みに入っていた。

判ったよ。だから俊之は芳佳が口を開く前にそう言った。判ったよ、送ってやるよ。

芳佳にはじめて会ったのは、大学一年の夏休みである。高校のころにつるんで遊んでいた松田という奴に誘われて、高校時代からよく通っていた渋谷の店に飲みに行った。そのとき、松田の彼女と一緒に連れて来たのが芳佳だったのである。

大学に入ったばかりのころに、俊之は昔の彼女と別れていた。相手から長い長い手紙が届いたのには「今どき……」と思ってちょっとびっくりしたが、俊之のほうももうそろそろかな、と思っていたので、特に寂しかったわけではなかった。その彼女と別れて以来、彼女がほしい、と切実に願ったこともなかったし、むしろ大学生になってからの数か月間を結構それなりに楽しく暮らしていた。

だから松田の誘いに乗って出かけて行ったのだって、決してそういう期待があったから、というわけではなかった。第一、俊之は女の子が来るということさえ知らなかったのである。

それなのに俊之は自分でも驚いてしまったくらいにいきなり、芳佳を気に入ってしまったのだった。

けれどその場ですぐに口説いてしまふ、というのはどうしても憚^{はば}られ、俊之はわざと不機嫌を装いながらしばらく黙って飲んでいた。高校時代の悪友たちには、俊之は女の口には不自由したことがないと思われていて——それは実際そうだったのだ——、だから連中の目の前ではじめて会った女を口説くのはイヤだったのである。

二時間ほどして、女の子たちのあいだに「そろそろ帰ろうか」という雰囲気の流れはじめた。俊之はここぞとばかりに立ちあがり「俺、明日朝早いからさ」などと大嘘をついて芳佳を送る役を買って出たのであった。

芳佳の家は世田谷の中町、俊之は品川だから方向はかなり違ったけれど、俊之は何も言わずに芳佳と同じ電車に乗りこんだ。ここで逃したら今度いつ会えるか判らないし、会おうとしても松田から松田の彼女という順路で手続きを踏まなければならない。その煩^{わづら}わしさと面倒さを考えれば、ここで多少遠廻りをしたほうがマシだと思ったのだった。

結局、電車の中で電話番号を聞き出すことに成功した。そのときもなるべく何気ないふうを装ったつもりだったが、あとになって芳佳は、店にいるときから「コレは来るな」と思っていたと言った。どうして、と訊ねたら、芳佳はフフ、と生意気な笑いを洩らして「判るわよ」と言ったのだった。俊之は芳佳のそういう不遜なところも、結構好きなのである。

次の日には電話をかけて、ドライブに誘った。車の中でキスをした。それが大学一年の夏休みだったから、付きあいはじめてもうそろそろ二年が経とうとしているわけだ。

芳佳は横浜市の郊外にある女子大に通っていた。中学校から付属校のある私立大学なのだが、よくあるパターンで、中学と高校は都内の同じ敷地内にあるのに、大学だけ人数的に収まりきらなくなつて郊外に移転してしまつたのである。中学から付属校に行つていた芳佳は、そのことに對してずっと文句を言い続けている。

「サギみたいなんよねえ、大学入つたらいきなりこんなイナカまで通わなくちゃいけないんでさあ」

一昨日も芳佳は、ハンドルを握っている俊之の隣りに坐つてそんなことを言つていた。

「『こんなイナカ』に通うようになってもう一年以上経つだろ」

俊之がからかうように言うのと、ぶうつと頬をふくらます。膝の上には教科書を広げている芳佳だが、そのわりに構文を覚えようと努力している気配は感じられない。

「電車の中じゃ覚えられないって芳佳が言うから送つてんだぞ。少しはやらないと意味ねえだろ」

俊之がそんな芳佳を横目で見て苦笑いしながら言うのと、芳佳は少し慌てたようにふくれた頬をもとに戻し、小さな声で「はい」と言つた。

大きくウェーブしている長い髪。いつも赤い口紅を塗る小さな口唇。九センチのヒール。わざと少し肩を抜いてルーズに着ている白のカットソー。そんな芳佳が、今みたいに子どものような感じで拗ねてみせたりするのは、俊之の前でだけだ。俊之はそのことに心地良い満足を覚えてい

る。

送ってほしいと言ったのだって、ほんとうは構文のためなんかではないことを俊之は知っていた。これが芳佳にとっても前期最後の試験なのだ。つまり、その日の試験が終わったときから芳佳にとっても夏休みがはじまるわけなのである。

「ねえ、この試験、ファイナルじゃないから一時間もかからないだけだね……」

やはり芳佳は、車が高速に乗ってしばらくするとそう切り出してきた。

「一時間……、ううん四十分……、やっぱり四十五分くらいかなあ」

芳佳は教科書を片手に持ったまま、真剣な表情で宙を見つめるようにして呟く。俊之は可笑しくなってきた、芳佳には判らないくらいの微笑みを洩らし、そして言った。

「待っててやるよ」

「ホント!？」

芳佳はキュッと顔を俊之のほうに向けて、手放しの嬉しさを満面に表した。こんなふうに、やはり自分の前でだけ無防備な表情を見せる芳佳が、俊之はとても好きである。

「じゃあさあ、じゃあさあ、試験終わったら「ジョーズ」で久しぶりにごはん食べてさあ、そのあとホラあたしがずーっと執着してた表参道のあの店のタペストリー買いに行つてさあ、それであたしん家行つてそれ飾つて……」

試験が終わつたらやりたいと思つていたことがよほどたくさん溜まっていたらしい。芳佳はそ

これまで一気に喋ってから、ふと黙り、さっきと同じ真面目な目つきで俊之のほうを見た。そうして、はしゃいだあとによくある空虚な感じの声になって、ほんとうに判らないというように言った。

「……そのあとどうしよっか」

俊之は思わず吹き出した。カワイイなあ、と心底から思う。白い肩を、ぎゅっと抱きしめたいという衝動的な欲望に駆られる。

「いいよ、何でも。お前の行きたいところ行って、お前のやりたいことやればいいじゃん」

笑ってそう答えながら、しかし俊之は考えていた。今日は、しよう。

俊之の試験は芳佳より前からはじまっていたし、ゆっくり会うということをずいぶんしていない。最後にしたのは半月くらいのも前だ。芳佳だって、そのことは考えているはずだった。

それを考えはじめたらいつもの昂揚感が下腹のほうから湧きあがってきて、俊之は下口唇を前歯で軽く噛んで口唇を鳴らした。

「あ、ねえトシ、次で降りるんだよ」

芳佳のことばにハッとした。左前方を見ると、芳佳の言ったとおり降りなければならない高速の出口がかなり近くまで迫ってきていた。

「悪い、ポーッとしてた」

そう言いながら俊之は急いで車線を変更する。午前中の下りの道路に車の数は少なく、あつと

いう間にいちばん左の車線に移ることができたけれど、今思えば、何度も通っているはずの芳佳の大学までの道のりを間違えたこと自体が、その日の俊之のコンディションを暗示していたのだと言えなくもない。それとも俊之がどことなくボーッとしていたのは、その夜芳佳と過ごすはずだったベッドの中のひとときを、あらぬときに考えていたからだろうか。

とにかくその数分後に起こることなど知る由もない俊之は高速を降りて国道を走りはじめてもなお、道を間違えたことなど気にもせずにさっき聞いたばかりの芳佳の声を耳の奥で再生させたりしていたのだった。

——あ、ねえトシ……。

聞き慣れた、心地の良い声である。芳佳が俊之を「新井クン」ではなく「トシ」と呼ぶようになったのはいつごろからだっだろう。もうかなり前のことのような気がする……。

俊之は運転しながらそんなことを考えていた。はじめて会った二年前のあの日から、芳佳は徐々に、けれど確実に俊之の生活に近づいてきて、今では俊之にとって絶対に失いたくないもののひとつになってしまった。

国道を真っ直ぐに南下して、県道との交差点を突っ切った先に、芳佳の大学の正門がある。その正門から校舎までがまた遠いのだと、よく芳佳はこぼす。

下り線を走ることになるから国道も全体的に流れは良かったが、県道との交差点の手前から混みはじめた。というのも、その交差点で右折する車が多いため右折車線の流れが詰まり、その上